

イザヤ書57章14b-21節

エフェソの信徒への手紙2章11-22節

マルコによる福音書6章30-44節

本日の福音書は、有名な五千人の食事の箇所です。四つの福音書すべてにあるお話です。四つの福音書すべてに掲載されているお話は、そう多くはありません。その意味では、このお話は、一世紀の教会において有名なお話であったと言えます。新共同訳でも聖書協会共同訳でも「五千人に食べ物を与える」という小見出しが付いています。しかし、それがどのような現象であったのかについては、解釈が分れます。

一般的にこのお話は、わずかな食料で五千人（女性と子どもを同数とすれば、一万五千人ですが）が食べることでできた、奇跡の出来事と解釈されます。それは、物語の結論部分に「人々は皆、食べて満腹した。そして、パン切れと魚の残りを集めると、十二の籠いっぱいになった。パンを食べた人は、五千人であった」（マルコ6:42-44）とあるからです。「満腹した」という訳は、すでに解釈が入っています。直訳すれば「満たされた」です。直訳の方が解釈の可能性が広がると思うのですが、聖書協会共同訳でもそうはなりませんでした。

新共同訳、聖書協会共同訳、そして口語訳も「満腹した」と訳している通り、伝統的な解釈は、イエス様によって食べ物が元の数以上に増えたというものです。そう解釈するのは、このような出来事が、『聖書（旧約）』にもあるからです。預言者エリヤは未亡人の家で小麦粉を増やしています（列王上17:8-14）。また、預言者エリシャも油を増やし（列王下4:1-8）、パンが増える奇跡も行っています（列王下4:42-44）。それらを前提としますと、ここでもイエス様がエリヤやエリシャと同じように、食料に関する奇跡をおこなったと解釈しても、問題ありません。しかし、増えたというような描写はないのです。その点が先の『聖書（旧約）』とは異なります。ただ、食べた人が満たされたことと、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになったとあるだけです。もちろん、かごがいっぱいになったから増えたと想像するのは、当然とも思えます。そして、他の福音書も、決してパンや魚が増えたと表現していないのですが、ヨハネ福音書は、「そこで、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた」（ヨハネ6:11）として、増えることを前提にしているように思えます。わたし自身、20代まではそのように考えていました。

近・現代の解釈では、パンが無限に増えるというような奇跡を、そのままに受け入れない傾向にあります。科学的にありえないからです。それゆえ、実際に何が起きたのかと考えるという解釈が生まれます。その代表的な一つに、群衆が、それぞれ食べ物を隠し持っていたというものです。つまり弟子たちがイエス様に命じられて、自分たちの食べ物を差し出した姿を見て、恥ずかしくなって、隠し持っていた食べ物を出したという解釈です。隠してあったものが出てきた、それゆえ結局、食べ物が余ったと解釈するのです。食べ物を分け合うという点では、現代的社会に必要な視点を持つ解釈です。しかし、この物語の冒頭には、

「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」（マルコ 6：34）とあります。「飼い主のいない羊のような」という表現は、安全な場所も必要な食料もない状態を意味します。それゆえ、イエス様は群衆に騙されてしまったこととなります。ただし、隠している食料を出し合ったら、その場にいる人数の必要数より増えたというのは、悪いお話ではありません。

それらとは別に、何らかの象徴的な意味を見出す解釈もあります。その代表として、この食事に聖餐式の原型の一つを見出すことです。イエス様が中心におられる食事、その食事によって、靈的に満たされたことを語っているという解釈です。確かに、たしかに、靈的に満たされることは大切ですから、そのような解釈もよいかもかもしれません。このように解釈の可能性がいろいろとあるからこそ、一世紀の教会はこのお話を大切にしたいのかもしれない。

それぞれ解釈は、それぞれ大切な意味があるのですが、わたしは、単純にイエス様が自分と弟子たちの食料を、その場にいる全員で分けたお話だと考えます。もちろん、群衆が、全く何一つ食料も持っていなかったとは思えませんが、その場にある食料を、ただその場の全員で分けた物語に他ならないと考えます。奇跡的に食べ物が増えないのに、圧倒的に足りない食料を分け合うことに、どれほどの意味があるか、という問いが起こります。しかし、それは「満たされる」（満腹と訳したとしても）という意味を、各一人ひとりが、生物的に栄養が満たされる意味でとらえるからです。このお話はそうではなく、イエス様が、「満たされる」という事柄の意味を、変えたお話なのです。つまり、「満たされる」とは、各一人ひとりの生命体としての栄養の必要を摂取すること、あるいは単純に食欲を満たすことではなく、その場にいる全員に食べ物が行き渡ることである、という意味の変換です。弟子たちがまず、他の人の分を考えて自分の分を取り、残りを他の人々に渡す。そして渡された人も同じように、他の人々の分を考えて自分の分を取り、それを全員に行き渡るまで繰り返す。そのような中で、誰かの分として残った屑が、12の籠一杯になった。物語はそう示していると思います。

イエス様のこの行為において、分け与えられた食料が生物的に空腹を満たすことはなかったでしょう。しかし、この世界にある食べ物とは、そういうものである。なぜならば、それが主なる神様がこの世界を創造された時の食料事情であるからです。イエス様は、お話の中で、「天を仰いで祝福し」（マルコ 6：41）てから分け始めます。それは単なる食膳の感謝の祈りではなく、今ある食料が誰によって与えられたものであるかを示しています。主なる神様が与えてくださったものであるから、独り占めするのでもなく、自分の分だと主張するのでもなく、ましてや奪い合うのでもなく、その場にあるものをその場の全員で分け合うのです。

イエス様のこの行為は、単なる食料に関する事柄にとどまりません。まことの平和への道を開きます。いつの時代も、食べ物を奪い合うことが、争いの原因の一つであるからです。イエス様は、このお話を通して、まことの平和へと膨れ上がるパン種を示してくださったのです。いま世界で繰り返されているような、人を傷つけることに膨れ上がるパン種ではなく、ともに主なる神様によって養われるパン種です。そのパン種を様々な形で伝える教会でありたいと思います。